

紅剣物語

黒き魚たちの渴き



くそつたれ、という言葉と共に落とされた溜息が終わらない内に、ぱちんと泥が跳ねた。一面泥のまったりした平面が続く中、カントの視線の先に白く蠢くものがある。夕暮れの残照に微かに鱗の線が浮かび、すぐに消えた。魚が反転したのだ。

そうすると保護色となっている体色のまま、魚は泥に同化して消えた。泥海の中へ逃げ込んだのだろう。

カントは苛々と唇を噛んでいる、隣の少年を見つめた。リリクは美しい頬を癩癩のままに歪めていた。南部臨海州の特徴となっている赤黒く焼けた肌でない、こんなに綺麗な肌は滅多にこの辺りでは見かけない。白い肌は黄昏時に照らされてやや赤く染まっている。普段薄い金色の髪も、こんなときは豪華な黄金に変わった。

金色の髪を丁寧に切り揃えて刺繍の入ったブラウスと揃いのベストを身に付け、深い葡萄色の外套を肩から羽織ったリリクは完全に自分の美しさを知り尽くしているようだとかントは思う。彼の白い肌に似合う色、整った容色に映える柄、そんなものたちに囲まれている彼の様子は本当に貴公子然としており、カントはいつも見惚れてしまうのだ。

カントの視線をいつものように受け流してリリクはまた足もとの貝殻を拾い、素早くそれを泥の海に投げ込んだ。ぴしゃっという泥跳ねの音がして、先ほどと同じく白い魚鱗が現れる。

「うまいね、リリク」

カントは呷く。リリクはふん、と鼻を鳴らして彼を小馬鹿にしたように笑い、あいつらは、と言った。

「呼吸しに泥の中から出てくるだろ。だから、あぶくが下から上がってくるんだ。大きなのが下からがばって開いたらそれがやつらの口さ。それに、俺が上手いんじゃないかってお前が下手なんだぜ、カント」

言いながらリリクの手は再び貝殻を拾った。どうやら拾い上げたのには中身が入っていたようで、それを放り投げては新しい貝を探している。石ころよりも貝殻のほうが多い町では、死んで中に泥砂の詰まった貝殻が石の代わりだ。棧橋の上には運ぶ途中で積み荷から落ちた貝殻がたくさん落ちている。

いくつか拾った貝殻をリリクはカントの手に握らせた。お前もやれよ、ということだ。カントはいくつかを彼を真似て泥の海に投げ込むが、魚に当たったものはなかった。

馬鹿、下手、とリリクは散々悪態をつき、カントの額を指で強く弾いた。痛いよ、とかントは顔をしかめて見せるが、リリクはお構いなしだ。げらげら声を上げて笑ったかと思うと、また苛々した表情に戻って泥の魚を貝で打つことに熱中している。

ばちん、という一際大きな音がして、魚が痙攣した。リリクが夢中になって苛めている魚たちは腹の側だけが白い。もがいている白く美しい魚鱗に赤いものがまみれ始めて、どうやら体を貝が切ったのだとかントにも分かった。

リリクは急激に醒めた、白けた顔つきになった。舌打ちをして放り出してあったままの鞆を手に取り、カントのこなど忘れたように駆け出す。カントは慌てて自分の鞆をつかみ、その後を追った。リリクの足は速い。彼はすっきり伸びた手足が華奢な印象を与えるが、それに反して運動能力は高かった。風を追い越すような勢いで走っていくリリクの背を追うことを諦め、カントは足を緩めた。

やや乱れた呼吸を整えながら、カントはこの町を囲む泥の海へ、その彼方の傾いた夕日へ目をやった。太陽の最後の強烈な光は全ての風景を焦茶色の影にしており、海に一時全てが同化した風でもあった。泥の海の上に一面、びっしり浮かんでいるのは小舟、水上生活者たちの家だ。縦横に走っている棧橋が差し詰め道代わりの、棧橋を中心にして広がる小舟の町。どれもこれも薄汚く小さな舟だが、それらが寄せ集まって群れているのは壮観とも言えた。

カントは小さく溜息をつく。彼はこの舟の町の出身であった。8年前、8才の頃に母親が死に、海洋騎士（ハイラン・エルグスト）のガクユーン家に養子に入った。海の子供（ハイラグ・ラット）と呼ばれる水上生活階級からの養子制度はこのクハイスの町特有のものだ。

クハイスは南部沿海州と呼ばれる地域の中では北西に位置し、一面の泥を誇る干潟と、沖まで張り出した棧橋の路地に建つ家々が特徴の海商都市である。直接接岸できない不便はあるが、この近海は潮の流れの機嫌が難しい。また岩礁と浅瀬の多い地域であって、クハイスが広がる湾岸が殆ど唯一安全に積み荷のやり取りができる場所でもあった。何

より、南部大陸の巨大都市マージと片道僅かに一日だ。

陸と海の交通の要所であることがクハイスの泥海にびっしりと棧橋を渡し、海上都市とでも呼ぶべき景観を作り上げている。「陸」には富豪と支配階級の屋敷、海上の「町」には労働者と市民、そして文字通りに海の上の小舟に住む水上生活者のほぼ3種類に階層は分けられた。人口の殆どは海商に従事し、何らかの形でその恩恵を受けている。故に海上生活者の子供たちのうちで身寄りのない子供は「町」の孤児院へ収容されて将来の労働層として教育され、その中から更に運の向く子供は「陸」の人々の養子になる道があった。それが「海の子供」である。

相互扶助の精神は海洋産業従事者の間に時折見られるが、その際たる形とも言えよう。犯罪歴がないこと、他に身寄りがいないことなどいくつかの条件はあるが、そうやって養子にいく子供は珍しくはない。カントも、そしてリリクも「海の子供」であった。

陸から眺める棧橋の群れと小舟の森は追憶をいつも呼び覚ました。辛い記憶のほうが多いくせに、離れてみると不思議と懐かしい場所のような気もした。魚の臭いも泥の臭いも、その腐ったような饅えた臭いもしない陸の屋敷の中に行くと、時折無性に泥に飛び込んで、何かを叫び出したくなる。無意味なことだと分かっている、とカントは海を眺めながら思った。

海からあがる魚があるから飢えていたわけではないが、あの泥の魚ばかりでは辟易した。沖の棧橋まで行って綺麗な海水を汲み、丁寧に洗っても中々泥臭さが抜けず、美味しい魚でもなかった。

けれどあの泥の中の魚が安楽に泥から出てきて干潟でまどろんでいるのを見ると、心の底から意味のない怒りが上がってくる。

それでもカントは生来感性が鈍い、良い言い方をするならおっとりしたところがあったから、先ほどのように苛立ちのままに傷を付けたなら心が痛む。

だが、リリクは違った。彼の苛立ちも自分のそれと同じ種類のものであるとカントは嗅ぎ付けているが、リリクは美しい猫が悪食であるがごとくに怒りを暴力に変えることを躊躇しなかった。それがあの泥の魚であることは救いだ。

——彼とて、その先があってはならないことを承知している。

カントは溜息をつきながら家路をゆったりとたどる。棧橋というには大きな橋は、この通りが直接陸へ通じていることを意味している。実際、路地へ入らなければ海上であることをそれほど感じないのだ。比較的浅い泥海の底にしかりした土台を静めてあるから、陸の家と構造的に変わったところは余り無い。強いて言えば、高い階層をもつ建物は重いというよりは立錘の均衡が悪いという点で嫌われて、殆ど見かけないことだけだろうか。ぼんやりそんなことを考えながら近道の棧橋へ乗り換え、カントは声を上げた。横から突き出てきた腕が、彼の裾をつかんだのだった。

「……なんだ、リリクか。帰ったのかと思った」

驚いて声を上げた腹いせにそんなことをいうと、嫌味の加減を分かったのか、リリクは秀麗な顔を歪めて笑った。

「うすのろ。お前みたいなのが海洋騎士じゃあクハイスも終わりだな。没落の放つ残照の如くに輝けり、か？ 俺の趣味じゃねえ」

「君みたいな医者も滅多にいないと思うよ」

溜息と共にカントは言った。カントは海洋騎士ではなく、リリクも医者でない。二人ともまだその見習いの見習い程度のものだが、将来はそうなるのに決まっていた。お互いの養家がその筋なのだ。けなしあって二人は同時に溜息になった。この話は面白くはない類に入った。

帰ろうよ、とカントはリリクを促した。既に日は落ちかけている。二人の通う修学院では日が落ちた後の補講は絶対にしない。それに、リリクはともかくカントは成績は良かった。

お互いに縁組み先が逆だったら良かったのだとカントは思う。リリクの成績と来たらひどいという言葉が優しいほどだし、カントは運動は苦手だ。海洋騎士というのは海上全般にかかわる警護役とも言える職で、運動どころかおおよその武芸一般を身に付けた上で操舵と潮と星の読みを要求される。最後の部分は知識に関わることだからカントは比較的自信があるが、何しろ武芸という言葉聞くだけで憂鬱になる。

リリクはこれの反対で、運動は何をさせてもずば抜けており、特に弓が上手くて目が良かった。が、どうにも腰を落

ち着けて考えることが苦手だ。自分とリリクの特徴が入れ代わっていたならこの気鬱さは少しは晴れるだろうか、とカントは考えながら、先に行く友人の影を追う。

リリクは彼を待つ間に拾っていたらしい貝殻をまとめて泥海に捨てながら、やけばちに靴の踵を鳴らして歩いている。その様子は先ほどの印象と余り変わらない。リリクは一時の不機嫌や癩癩でカントから離れても、必ずカントの元へ戻ってきた。

おそらく、リリクの中にある苛立ちと同じ種類のことを自分が飼っているのを彼は分かっているからだ。カントは思っている。それを口にしないまでも、空気として発散してもいい相手だと、リリクはカントを見切っているのだ。……そういう相手だとたかを括られているのは面白くない。

カントが溜息をついたとき、それが契機であったようにリリクが振り返った。その動作の素早さに気圧されてカントは怯んだ。リリクは手を伸ばしてカントの鞆を奪い取った。

「ほら、もう陸に灯りが入るぜ！ 急げよ、カント！」

そんなことを叫んでリリクはぱっと駆け出した。待てよと叫んでカントは再び彼を追う。リリクが振り回している鞆には養父母から買ってもらった大切な本やノートが入っているのだ。

「返せよ、リリック！」

声を上げながらカントは年上の友人を追った。全く、いつもこんなことばかりだ。彼は苛立ったとき、自分をひどくからかって発散する。カントは唇をゆがめる。栈橋の終わりにようやく彼に追いつくことができた。軽く呼吸が途切れている自分に比べてリリクは微かに頬を紅潮させているだけだった。彼は造作は物語の中の貴公子然とした美形だったから、その仄かな赤みさえ美しかった。きれいに整った彫像のような顔立ちだ。けれど、その容貌がかえって苛立ちを高めるときもあるのだった。

「返せよ、リリク」

カントは呼吸を宥めながら手を突き出す。リリクは唇の端で薄くにやつきながら、どうしようかなと鞆を振り回した。返せたら、と更に声を上げながらカントはリリクの手から鞆を奪い返そうと彼の周囲をぐるぐる回った。リリクは満面の、意地の悪い笑みになりながら手をかざし、踊るような足付きでカントの襲撃を軽くいなす。

不意に、あ、とリリクが声をあげた。カントも一瞬置いて似たような声を上げた。多少ゆるくなっていた鞆の取っ手が外れ、本体のほう泥海に落下したのだ。重い音を立てて鞆が海に落ちる。泥の比重の関係でしばらくは浮いているが、いずれ沈んでいくだろう。

「あ、悪い……」

一瞬の茫然が二人の間を過ぎた頃、リリクが呟いた。カントはその言葉で我に返った。あの鞆の中の本もノートも、養父母に買ってもらった大切なものだ。何か考えるより先に、体が動いていた。カントは自分の外套を脱ぎ捨てると、泥の海へ飛び込んだ。この辺りはそれほど深くはない。リリクが自分を呼んでいたが、それには構わずに鞆へ向かって泥をかき分けて進む。鞆をつかんで同じように戻ってくると、栈橋の上からリリクが手を差し伸べて鞆、と怒鳴った。カントは先に鞆を渡し、栈橋の横に着いた梯子で上へあがった。

体は泥だらけだった。リリクがすまなそうに顔をしかめ、再び悪い、と言った。

「俺、お前の家まで行って説明とかしようか」

「いいよ。父さんも母さんも、僕のやることあんまり言わないんだ。鞆の取っ手、古くなってたのは確かだったし……」

おそらくその通りになるだろう。カントの養父である初老の海洋騎士は穏やかな人柄だったし、その妻であり養母である女は子に恵まれなかった現実の辻褄を、カントで合わせようとしている。

それから、気の重い、だるい沈黙になった。カントは振り返って泥海と、その彼方に最後の光を投げる太陽を見た。気鬱な溜息が二人から同時に漏れた。

ただいま、と呟きながら家に入ると、養母が奥からぱっと飛んできた。相変わらずリリックのことをいつでも視界に置きたいのだ。

「お帰り、リリック。ねえ、今日はねえ……」

洪水のように始まる語り口を適当に頷いて聞き流し、リリックは部屋へあがった。家のすぐ裏手には養父の開いている診療所がある。建物が別のせいかあまりこの家は葉臭くない。それがリリックには妙な安堵感になる。いずれ自分は養父の後を次いであの診療所の主にならなくてはいけない。いけない、と呟くと更に心が重たくなるのを自覚した。カントは時折自分とカントの立場が入れ代わってれば良かったのだと呟くが、それは的確であった。自分は運動は何でも好きだが、成績など考えたくもない。

自分は向かない。医者になる適性がないのだ。それは成績のこととは関連なく、診療所にいる患者たちが養父に頼むような縋るような視線を向けるのを見る度に、自覚される。……あの、他人からの縋るような目、悲しげな信頼を見る度に、どこか、追い詰められるようないたたまれなさが襲ってきて、叫び出したくなる。

長い溜息をリリックはついた。カントは似た境遇の「海の子供」であった。彼と最初に出会った頃、同じ「海の子供」が修学所にも何人かいたのだが、お互いに引き合うように共にいるのはカント一人だ。

理知的な瞳と静かな物言いがすっかりあの子供を大人びさせ、上流というものへ馴染ませているが、その目の奥に自分と同じ不満、微かな苛立ちを感じている。自分たちは似ているのだ。何かに鬱屈し、脅え、吠え出さぬように自分を抑えているのが。

けれど今日は悪いことをしてしまった。あんなつもりではなかったのだ。さほどカントが怒っていなかったのが幸いでもあるが、とにかく明日、また謝っておこうとリリックは頷く。

……カントを溜まってきた苛立ちの捌け口になっているのは、悪いことだ。それは自分でも分かっている。けれどこうして何かをしてしまう度に彼の機嫌を必要以上に上げておこうとも思う。悪態をつき、散々からかっているカントと離れない。もしかしたら、より相手に依存しているのはリリックのほうかもしれなかった。……面白い考えではなかった。

夕食の支度ができたという声に合わせてリリックは階下へ降りた。養父も既に診療を終えて帰宅しており、養母の手料理を口にはこびながら、しばらくは雑談が続く。最近学校はどうだと聞かれてリリックは口の中でぶつぶつ言った。養父母は一斉に朗らかに笑った。

「まあまあ、無理をすることはしないのよ、リリック。もし何か他にやりたいことがあるんだったら、お医者なんかよりもずっと素敵よ」

養母の言い方は、リリックを傷つけまいとする優しさに彩られて心地はいい。リリックは曖昧に笑う。養父がそうだな、と優しい声を出した。

「まあ、医者というのも世の中には儲けることが簡単だという奴もいるが、気苦労の割には報われないからな。お前が嫌ならそれでかまわんよ」

「あ、……俺、別に、医者が嫌じゃないから」

リリックはいつもと同じ嘘をつく。養父母はリリックに優しい。医者の後継が欲しくて養子にしたはずのリリックがどうにもならない成績でも責めることがない。お前にやりたいことがあればいいんだよと言ってくれる。

—— 違う！

リリックは叫びだしたい気持ちになる。

違う、違う、俺は医者になりたくなんかない、人の命を扱うなんて、出来ないんだ！

何よりも怖いのは、その生命を賭けた信頼を患者が寄せてくることで、最期を見取った遺族が養父に向かってありがとうと頭を下げることだ。その痛々しい沈黙を、自分は甘受できそうにない。だがリリックの言葉に養父母は表情を緩めた。口では何といても、リリックが裏手の診療所を継いでくれると思うのが彼らの楽しみなのだから。リリックは心の

中で溜息ばかりをつく。こんなときに、明らかに環境の良くなかった海上での生活を思い返しているのは不遜だろうか。

風はいつでも泥臭く、魚も同じ臭いがした。運搬車からこぼれた貝を拾い、魚を捕り、どうにかこうにか食いつないでいた日々。酔うとからんで殴る父親、泣き叫ぶだけの母親、あの二人が馬車に轢かれて世を去ったとき、自分の胸によぎったのは安堵だった。明らかにリリクはほっとしたのだ。

だが、今ならあの二人はいない。海の上に小舟を浮かべて生活することがどれだけ気楽で気儘なことなのか、良く知っている。そのうちに好きな女でも出来たら船を引き払って都市で仕事を探したっていい。そんな、夢想というものをいじり回しているのは何故。現実に不満などない。生活に不服などない。ありはしない。何もかも恵まれて、養父母も診療所で働く看護師や看護婦たちも自分に優しい。めこぼしをくれないのは教師くらいだ。だがその教師たちも自分の整った顔で微笑みを向ければ、その矛先がゆるむ。

——こんな顔。

リリクは自分で利用している狡さも承知の上で、それもまた、鬱の種であることを知っている。カントだって、時々自分の横顔を眺めては感嘆の吐息をついているのだから。

再びカントのことへ思考が戻ってリリクは微かに溜息になる。明日、きちんと謝罪した方がいいだろうが別れ際の重苦しい空気はどうにもならない。カントは寝れば忘れるリリクと違って、慎重でじっくり腰を据えるほうだ。悪くいえば、しつこい。それを思うと気が重かった。

夕食が終わると養父母の話に適当に混じって時間を潰し、それから部屋に上がるのがいつもの習慣だった。カントのところも似たような事情らしいが、この家も後継者がいなくてリリクを養子に入れた上、二人とも子供が好きだ。俺は子供じゃないと思うのも片隅で、自分を引き取って育ててもらっていることには感謝を素直に感じるから、リリクは大概をつまらなれないと思いつき合っている。

この日、養父が話を始めたのはつい先日亡くなった大陸の聖騎士の話であった。

——ある聖騎士が戦死した。聖騎士とは聖職を勤めながら神聖王国の騎士として国を守る者たちのことである。随分と以前、養父はこの男に施したことがあったらしい。怪我をしていたのを助けてやったのだ。巡礼に出る聖職者に施しをするのは市民の義務だと養父は苦笑するが、男は聖騎士の称号を与えられた後でも養父への恩を忘れなかった。時折は手紙を寄越していたし、何度かクハイスにも顔を出していたのを覚えている。騎士としての力量の頂点を緩やかに下りつつある年齢だったが穏やかで、自分を律し終えた大人だけがもつ風格があった。

だが彼は一度戦場に立つと人が変わったように勇猛勝つ果敢であり、敵に対して容赦がなかった。剣の腕も素晴らしかった。戦功の話は彼は殆どしなかったが、腰につられた見事な紅剣のことだけは、リリクも覚えている。

戦死といわれてリリクは軽い感慨を覚えた。元より悲しみを覚えるほどの接触があったわけでもない。ただ知り合いが消えた、その消滅の実感が湧かない。ふうん、と半ば義務に近い感触に相槌を打つと、養父は苦笑してリリクの膝を軽く叩いた。

「それで、お前に頼みがあるんだよ」

リリクは顔を上げる。聖騎士の話しは言われれば思い出す程度のことではなかったからだ。きょとんとした顔をしたのを養父母が暖かに笑った。リリクは照れ笑いになりながら頭を掻いた。

「お前の友達に、ガクユーン殿の子息がいたろう。明日、修学所へ行ったら手紙を渡して欲しいのだ」

「いいけど……どうしたの、養父さん？」

手紙を受取ながらリリクは首をかしげる。養父はあいまいに頷いて長細い包みを居間の奥から持ち出し、リリクに渡した。リリクは開けてもいいかを目で問うた。養父が頷く。固く縛られた口を緩めて一振りすると、リリクは思わず目を見開いた。

何かが吹きつけてくるような熱気が一瞬頬を撫でた気がして、リリクははっとする。これは、見たことがある。あの騎士の腰にあった……養父を見ると、初老に差しかかった医師はリリクに目を細めて頷いた。リリクは喘ぐような吐息を漏らしてそれに見入った。

——それは一振りの剣であった。落日を固め、抜き出したように赤い。鞘に彫り込まれた精緻な紋様は羽ばたく鳥に、咲き誇る蘭の花だ。どちらも遠い昔に滅びた漢氏という民族の様式をもっている。目を奪うほど美しく、気高い香気を放つ剣であった。何か吹きつけてくるとリリクが思ったようにその波動、剣の持つ得体の知れない圧迫感が迫ってくる。胸に、強く、強く強く。

恐怖にかられてリリクは視線を放した。怖い。この剣は、何かいやな気配がする。見つめていると心の奥底にしまいこんだ何かを引きずり出されそうだ……呻いた声は、どこか歓喜に似ている。

「いい剣だな、素人目にもわかる」

養父が呟いた。リリクは茫然からまだ完全に回復していない思考を動かして頷いた。この剣を何故持っているのだろうとやっと思い至って養父を見ると、養父は苦笑した。

「彼の遺族から形見ということで、私のところへ。何故これをうちへ送って来たのか、全く理解に苦しむが……」

そうだろうとリリクは思う。

この剣の息苦しくなるほどの完璧さは、敢えて手放す選択をさせるものではなかった。遺言でもあれば別だろうが、こんな剣を医者のところへ送ると指定するのはおかしな話でもある。聖騎士仲間が神聖教会への寄付か、その辺りが妥当でないか。

「まあ、私ではどうにもならないからな。ガクユーン殿に見ていただいて、寄付をするなりご領主様に差し上げるなりするさ」

クハイスの名士の社交やお互いの養子が仲が良いこともあって、比較的養父はカントの家と行き来がある。が、ガクユーン家と言ったらこのクハイスでも屈指の名騎士家、正面からまともに郵便にしたり謁見を願ったりするとこの話、いつ出来るかも分からないのだ。裏口からではあるが、この方が手っ取り早く、確実でもある。リリクは頷き、手紙を懐に入れた。カントに話しかける切っ掛けになってくれるのも実際、ありがたいものであった。

翌日あったカントはそれほど不機嫌そうではなかった。鞆は新しいものへ替わっている。手紙を渡して昨日はごめんと言うと、カントは薄く笑って肩をすくめた。リリクのようところどころ感情で変わらない目の色を淡々とさせながら、逆に褒められたよ、と苦笑している。

「教科書とかノートとか、大切にしてくれて、だってさ……服は洗えばいいからって」

そうか、とリリクは簡単に答えた。服もノートも本も、安いものではないのだ。それをいいと言える家に今二人ともがいることが、幸運なのは間違いない。……船の生活者だったらどれか一つでも欠損したら嫌というほど殴られるし、相手の家にどなり込むこともあるかもしれない。

手紙なんて珍しいねとカントが言ったから、リリクは昨日の失敗の分を埋めるように言葉を並べ立てて剣の話をする。聖騎士ダグト公だね、とカントは頷いた。

「知ってんのか」

やや鼻白んでリリクは言った。まあ、とカントは頷いた。

「有名な話さ。神の聖句を口にしながら悪魔の如く敵を屠る騎士、その前に如何に敵があれどその後ろには人がない。そう言われるくらい、凄まじかったって……どんな気分だろうね、人を殺すなんてさ」

カントの声はいつものように穏やかで静かだったから、最後の言葉も聞き逃すところであった。リリクはおい、と軽い声を出した。脅えたのかも知れなかった。

「そんな怖いこと言うなよ。お前、時々すげえ目付きになるな」

「——僕もそうだけど、リリクだってものすごく苛々しているときがあるよ。僕はただ……そんなことにつき合いたくないだけさ」

「同感」

リリクは冷めた声で言った。カントは肩をすくめて剣を見たいなと言った。リリクは頷いた。今度遊びにこいよと言うと、カントは今度は嬉しそうな顔をした。もうすっかり機嫌を直しているようだった。

リリックの家は診療所とは別の建物であるにも関わらず、いつでも薬草独特の臭いがした。黴たような饅えたような、慣れないと僅かに顔をしかめそうになる。それはカントが毎回示す反応であったから、リリックはにやにや笑いながらもすぐに三階の自室へカントを上げ、窓を開けてくれた。リリックは診療所の空気に慣れていて自宅は全然臭わないと口にするが、カントには多少辛いものだった。

外気が流れ込むと、それは潮の臭い。僅かに混じる泥臭さが逆に安堵を呼んで来る。

「これ、後でおばさんに渡しておいて貰えない？　うちの義母から」

カントは鞆の中から預かってきた手紙をリリックに渡す。中身を見るようなおどけた仕草でリリックがそれを西日にかざし、またお茶会じゃねえのと悪態をついた。そういうリリックの養母も今日はお茶会らしく、姿が見えない。

そうだろうね、とカントは苦笑気味に頷いた。カントの物心ついたときには既に父はおらず、母は船乗り相手の酒場で給仕をし、金で片のつく恋愛を繰り返していた。母がそうした恋人に海に沈められてカントは孤児となり、やがて「海の子供」として養子へ出るが、そこで目にしたのは陸地で暮らす上流社会人たちの暇なこととお茶会の多いことだ。それが悪いことだとは思わない。需要のあるところに供給が有る。彼等の散財浪費が海に住む者達に広い意味で還元されていることだってあるだろう。

けれどカントは鞆にしる靴にしる、駄目になってしまった本にしる、気軽に与えられると気が重くなる。それにどれだけの価値があるのかを過大評価していた過去を抜けて辿りついた先は、浪費としか感じないものに惜しみなく金を遣う人々の世界だった。それが義母の楽しみであることは承知しているし、意外に気苦労の多い世界でもあるから、発散しなくてはならないことも分かる――が。

承服できない心はどの海に沈めたらいいのだろう。カントは僅かに吐息を落とす。気に入らないことなんかない、と繰り返して胸に呟きつづけている自覚はあった。リリックが手紙を自分の机に放り出し、待っていると行って姿を消した。例の剣を見せてくれるつもりでいるのだろう。

養父はリリックの義父からの手紙に未だ返信を与えていないが、聖騎士の遺産というべき剣が何故、という疑問を口にしていた。困惑しているのは誰もが同じなのだ。領主様に差し上げるのがよいだろうなという声に浮いていた色濃い迷いを、カントも当然に思えた。養父は昨日から領海の警邏に出ている。十日前後は戻ってこないから、剣を預かるにしても断るにしても、この期間に見物させてもらうのが最良と呼べた。

リリックはすぐに戻ってきた。手にしている細長い包みが剣なのだろう。

聖騎士ダグト公の話のカントは聞いたことがあった。養父も海洋騎士であるし、自身そうした物語が好きだったのだ。足らぬ現実から逃れるように本の中へ、空想の中へ。代価行為であると薄く承知していたものの、英雄譚や冒険譚はカントの心を確実に酔わせてくれた。

敵に死を、神の前には敬虔な祈りを。奪った命の重さの分だけ彼を巻く空気も濃くなるようだという記述をカントは憧れと僅かな畏怖と……そしてごく微量の何かの異分子を以って眺めていた。

自分には出来ない、他人を手にかけることなど恐らく出来ない。技術的なことだけではなくて、精神的なものまで足らない。前を向くよりは足元を確かめたる性質だということは、自分でも嫌というほど知っている。だから躊躇い無く道突き進んでいく――例えばリリックのような無遠慮だとしても――者への感慨は尚更深いのだ。

彼の残した剣というだけで、カントには格別だった。触ってはいけないと言われている、例えば聖杯などに特別に触れてもいいよと言われたような。綴りの向こう側の、遥かに自由な物語達の結晶が自分の手の届く場所にあるというのが不思議でもあり、歓喜でもあった。リリックはカントの様子に僅かに笑った。彼の笑みは時折見惚れるほど甘い。本質は悪食の猫にしても、毛並みの美しさは一級なのだ。

「お前、剣もろくに触れねえくせにこんな見たいんだ？」

それはいつもの意地の悪い言葉であったが、カントは鈍く笑って見せるに留まった。他のことは滑り落ちていく水のようなもので、リリックの厭味にも鈍感になっていたのだ。

「いいじゃない、僕は興味があるんだよ。聖騎士公の剣に」

理解できないと言った表情でリリクは肩をすくめた。彼がいつも以上に勿体ぶっているのを察し、カントはリリック、と大きな声を出した。彼の義母が彼をそう呼んでいるせいで、彼はそう愛称されるのを好まない。案の定、リリクは綺麗な顔を思いきり歪めた。子供扱いのように感じるだろうし、照れくさいのもあるだろう。彼は好き放題に言葉を重ねてカントをからかうくせに、自分はそれが大嫌いなのだ。

「急かすなよ。ほら」

リリクが布に巻かれたままの剣を捧げ持つようにし、カントに手渡す。芝居がかったような仕草だと思った。リリクは自分が剣を目にした衝動を押さえているのを理解しているのだろう。彼は粗野を振舞っているが神経は細かい。乱暴な喋り方も雑な仕草も、自身の内側を晒してしまうことを恐れているからなのだと、カントはどことなく感じている。その苛立ちを些細な暴力に変えて魚苛めに熱中してられるなら、それはリリクにとっても幸福なことであるはずだとも。

手の中の剣は、思っていたよりも軽かった。木の刀身に銀を張っただけの偽物ではないのかという疑念がふと頭をかすめ、カントは殆ど夢中で布をほどく。羽化を終えた蝶のように鮮やかに、それは姿を見せた。

海へ沈む落日よりも深く、鮮やかな赤がまずは目に入った。朱金でもなければ深紅でもなく、両方の華やかさと陰翳を併せ持つ、退嬰的な美しさだ。細身の優美な刀身を包む鞘には翼を広げる鳥と咲き誇る蘭の花が彫られている。彫刻の陰翳が構図の深みを加えて躍動感と生命感が揺らぐように感じられ、カントは僅かに呼吸さえ忘れた。

魅入られるようでもあった。この剣に備わっている強い声が自分を抜けと手に入れろと直接脳裏へ囁いてくるようだ。肌に吹きつけるようにあたる、力ある魅惑に突き動かされるように、カントは滑り止めにしては精緻な紋様の入った柄に手を掛けた。

おい、と戸惑った声がしたのはその時だった。カントははっとする。自分が夢中で剣を抜こうとしていたのだと思い至ったのは、それから更に一瞬が過ぎてからのことだ。

「玩具じゃないんだぜ、カント。お前が扱うと怪我する、やめとけて」

リリクは何故か怯えたような顔をしていた。カントはそれを数瞬の間見遣って、ぎこちなく唇を緩めた。笑顔になったつもりであった。

「大丈夫、ちょっと抜くだけだから……かなり軽いしね。僕だって騎士の後継者なんだから、全然触ったことがないわけじゃないんだ」

好きではなかったけれど。

リリクは苦笑った。彼はきっと剣を抜こうと思ったことはないだろう。カントの生業がいずれ人を死地に立たせるべきものであるとするなら、彼の生業はその逆だ。その自制がリリクに剣を抜かせない。けれど、とカントは僅かに内心で呟く。リリクのその慎重さに苛立ちを覚えるのは何故だろう。いや、それはもしかしたらその名のものではないかもしれない。苛立ちではなく、……優越と言うのかも。カントが手にしようとしないう魚を撃つための貝をリリクが無理やり握らせる時、彼の美しい顔立ちに見え隠れする軽侮なのだろうか。

リリク、とカントはくっきりした声を出した。

「大丈夫、僕は養父の剣だって触ったこともあるし、時々手入れもするんだ。反射神経なんか要らないからね。刀身を見たくない？ 鞘がこんなに凄いなもの、きっと刀身も良いものだと思うよ」

リリクはふんと鼻を鳴らしてそれを受諾した。彼は年下であり、普段は小突き回しているカントが自分を軽く扱ったのが気に入らないに違いなかった。カントは再び柄に手を掛けた。ちらりとリリクを見れば、彼も呼吸を潜めてカントの手元を凝視している。重々しく頷いて見せ、カントはゆっくりと鞘から刀身を抜き出した。やはりそれは鞘と同じく見事であった。細身であることは鞘を目にした瞬間に理解することだったが、その印象を改めて強くする。やや反りかえった輪郭が鋭利だ。

……溜息は、ほぼ同時だった。表現する言葉を思いつかない時にも溜息が出ることを二人は悟った。カントは剣の反りが良く見えるように剣を垂直に持ち、片刃の剣の背を軽く手で支えた。殆ど重さは感じない。軽い、と言うよりは手

の一部のように馴染む。紛れもなく名剣だとカントは目を細めた。姿形は幾らでも繕うことが出来るが、剣自身の持つ気配などは作り出せない。

刃止めの金具がしっかりかかっていることを指先で確かめると、カントはリリクから離れて立ち、軽く剣を振り下ろした。切っ先が軽く床につく直前、カントの意思を知っているようにぴたりと動作が止まった。それは滅多にないことであったが、カントは違和感に首をかしげながら握り締めた柄を見た。内側に水でも入っているのか、妙な異動感がある。水にしては重い動きだが、確かに自分の掌の先をぞろ動いた感覚がするのだ。

カントは黙ったまま剣を見つめる。良い剣であった。

沈黙の時間がどれだけだったのか、リリクは数えていなかった。ただ、連れ立って遊びまわっていた年下の友人と自分の間に、何か重く、得体の知れない影が落ちたことだけは理解した。二人は黙っていた。長いこと、黙りこくっていた。やがて漏れた吐息で、呪縛が解けたように身体が動いた。リリクがカントを見ると、彼も同じことをした。視線があって僅かな間を置き、二人とも、温い溜息のように笑った。

「……ちょっとこれ、変なんだ。柄に何か入ってる」

カントが苦笑で凍えたような表情を解しながら言った。リリクは促されるままに剣を受け取る。彼も剣に触れたことがないわけではない。カントのようにいやいやでもなく、リリクは武芸一般というものに親しんでいる。養家が医術の家だからカントの所のように、日常ではないにしろ、修学所では護身術の一環として剣や弓を教える。

カントがそっと壁際に寄ったのを確認して、リリクは軽くその剣を振ってみた。なるほどカントの言う通り、剣を振る度に柄の内側で何か動く気配がする。カントは粘り気のある水のようなと言ったが、リリクにはもう少し違うものに感じられる。良い気配じゃないな、とリリクは眉をひそめた。気味が悪いというより、人の心に巣食う不安の薄暮を揺すられるような落ち着かなさだ。……けれど。

「お前ん家の義父さん、これ、どうすると思う……？」

カントの瞳が僅かに鈍く光ったような気がした。

「……どう、だろう……でも、これは義父のものではないし……」

言いかけた言葉は次第に消えていった。カントが考え込んでしまったのを見て、リリクは剣を鞘に収め、自分の寝台に腰掛けて窓から差し込む日に照らした。きらめく赤は夕日よりも更に心を掻き立てる何かを放っていた。惜しいな、と単純な思いが浮かんだ。

リリクの義父は剣を所有することに興味を持たない。骨董的な価値もあるだろうから、形見分けの品として飾っておくという選択も出来ただろうが、海洋騎士に相談するという結論は、その答えを導かない。義父はこの剣を手元に置く気はないのだ。

自分の前から消えてなくなる。瞬間的に沸いた苛立ちにリリクは自分で動揺した。自分の性質がどちらかというなら感情的で衝動的なことは分かっている。罪のない、小さなものを傷つけているのはそれが生贄だからだ。自分の中にある飼い馴らせないものに代用品の餌を与えて大人しくさせる為の。

剣を所有することが自分にとって良い結果になるという想像は全く浮かばなかった。強烈に惹きつけられるのと同じに、いけないという警鐘を聞く。この警告の声を聞くことが今までリリクがふらふらしながらも均衡を保持できた一番の理由だろう。あるいは誰の言葉よりも素直に従っているのかもしれない。

「惜しいよね」

ぼつんと呟かれた言葉に、だからリリクはぎくりとした。見透かされたような気がしたのだ。カントはじっとリリクのほうを見ていたが、視線は剣に吸いつけられてぴくりともしていなかった。

「義父さんは……多分、領主様に献上してしまうんじゃないかと、僕は思うんだ……」

そんな事をどうやら海洋騎士であるカントの義父は呟いたらしかった。そうかとリリクは頷いた。それは不自然なことでもなかった。領主でなければ聖教会への寄付でもいい。元々聖騎士の持ち物なのだから、最初からそうされても当然だったろう。

「仕方ねえよ、この剣はもう誰の所有物でも……」

言いかけ、リリクは急激に上がってきた一つの考えに語尾を途切れさせた。頭の中で烈しく「いけない、いけない」と誰かが叫んでいる。

「そう、誰のものでも、ね……」

呻くような、低い声がした。それがカントのものだとリリクは一瞬気付かなかった。分からないほど声はかすれ、僅かに震えているようだった。カントの視線が自分の頬に当たっているのが分かった。彼も、目を合わせることを僅かに

恐怖している。リリクは一瞬目を閉じ、そして鞘を握り締めて剣をつくづくに見た。残照が窓から流れ込む。

畏怖、感歎、そして—— 心の中に、絡みついてくる何か。

欲しい。

(いけない)

欲しい……

(イケナイ……)

そんなことは分かっている、でも、……手に出来なくなるのは……堪えられない損失だから……！

リリクは鞘を掴む手に力を込めた。誰か、それが見えない強制力だとしても、誰であってもこの手から剣を取り上げるとしたら途方もない理不尽と感じるに違いなかった。ごくりという音が自分の喉で鳴った。それに弾かれたようにカントが顔を上げるのが、視界に映った。

リリクは今こそ、思い詰めたような顔をしている友人にまっすぐ視線をあてる。同じようにカントの瞳がリリクにあたった。その中に浮かんでいる餓えたように求める光。そしてその中に映りこむ、同じ表情をした自分自身。うわ言のように、カントが呟いた。

「持ち主はいない、んだ、よね……」

頷いた自分のうなじも、熱を出した時のように感覚がふわふわしている。リリクは現実味を取り戻そうともう一度頷き、いない、と繰り返した。

今度の沈黙は先程よりも遥かに長く、緊張を孕んでいた。二人はお互いを試しあう様に、長いこと動かなかった。目を先に逸らした方が負けだというような頑なさで、友人を殆ど睨んでいた。

不意に視界が暗くなった。太陽が雲に隠れたのだ。その瞬間に、二人はどちらからともなく頷きあった。

「秘密だ」

リリクは畳み掛けるように言った。カントはそれに誓いを立てるように片手を上げてリリクの言葉を増補した。

「二人だけの、ね」

夕方帰宅したリリクの義母は、子供達が妙に蒼褪めているのにすぐ気付いた。どうしたの、と聞くと二人は視線を交し合い、海洋騎士家の養子である少年が重たそうに口を動かした。

—— 剣が、なくなってしまったんです。

剣と聞き返したのは、彼女にとって一瞬記憶から取り戻せないものであったからだ。彼女の義理の息子が補足してくれなければ、思い出せなかったかもしれない。

—— 剣がすごく綺麗だったから、俺達、ちょっと部屋の中で振ってみて……でも部屋じゃ危ないから、海のほうへ行こうって話になって。

息子が俯き加減にそんなことをぽつぽつ語る。途中の棧橋に出ている屋台で喉が乾いたから果物を買って、受け取ろうと剣を屋台に立て掛けるように置いたという。果物を食べやすいように切ってもらい、行こうかと下を見るともうそこに剣の姿は無かった……

彼女は息子とその友人を見る。二人とも下を向いたきりであった。顔を上げられないのだろう。彼女はそう、と優しく頷いて見せた。剣の始末を夫が困惑していたのは確かだし、その話を突然持ちこまれた方もそうだろう。夫に相談して探さなくてはならないが、無理をすることでもなかった。誰かの持ち物であるなら話は別だが、現在の所、それは夫であったような気がするほど、所有は曖昧であった。

いいのよ、と言ったのは少年達の負担を軽くしてやりたい心であった。「海の子供」と呼ばれている養子制度を通じて家にきた子供達だ。何かの失策失態が再び自分たちをあの泥の海へ追いやるのではないかと恐れているのだろう。

彼女は海の生活者の詳しいことなど何一つ知らなかったが、環境が良くないとは感じていた。彼女はその場所では生きていけぬであろう自分自身を良く知っており、そこへ戻すことが子供達にとってどれだけ辛いだろうかと思うと胸に痛みを覚えるほどに、無知ではあるが善良でもあった。

少年達に微笑みながら、心配しなくていいのよと彼女は言った。不注意だったけど、あなたたちだけのせいじゃありませんからね。息子の友人にも、宥めるように笑みを向け、帰宅を促した。彼の家にはこちらから知らせなくてはならないが、それは捜索を終えてからの報告をつける方が良い。安心しなさいねというと、彼は唇を僅かに上げた。

—— ごめんなさい。

それでも出ていきかけた時に彼は振りかえってそう言った。

—— 本当に、本当にごめんなさい……

声が今にも泣き出しそうだったから、彼女は殊更満面の笑みで頷いた。彼が日の落ちた街角に消えたのを確認してから扉を閉めると、似たような顔付きの息子が、喘ぐように呟いた。

—— 本当に、ごめん、俺……

その声は、あの少年とそっくり同じに聞こえた。懺悔のようにも耳に響いた。

夕日の残滓がようやく海の彼方へ消えようとしていた。もう帰らなきゃ。そんな事をカントは呟くが、中々腰が上がらない。体は正直だ、望みと違うことを強いる時、酷く重たく感じるから。カントはふうっと溜息になる。こんなことじゃいけない、ということも分かっている。養父の名を汚さないような十分な功績を上げた上で騎士位を受け、海洋騎士となり、優しく厳しく自分を養育してくれた養父の恩に応えなくては。

再び、溜息。カントは苦笑になった。夕日よりもなお赤い剣を軽く振り、立ち上がる。小高い丘から見下ろすと、一面燃える海がまぶしく目を焼いた。名前を呼ばれて振り向けば、金髪の友人が怒ったような顔で立っていた。リリクと呟いた声は、自分でも可笑しいくらいにぼかんとしている。

「お前、毎日来てるだろ」

リリクはやはり苛立っているのだった。

「あんまり頻繁にするなよ。剣のことは誰にも喋らないけどさ、お前がこんなにしょっちゅうふらふら出歩いてたら目立つって」

カントはごめんよと口先だけで謝った。謝罪の薄さに更にリリクは顔を歪めた。美しい造形は眉をひそめただけでも相当胸に応える。心底から厭うような顔つきだった。カントはごめん、と強く言った。

「リリク、僕、ちょっと煮詰まり気味なのかもしれない……」

哨戒から帰宅した養父はカントとリリクの「過失」を責めはしなかった。結局のところ紅剣の所持について、誰にも権利はなかったのである。謝罪に来たリリクを返した後、養父はカントに剣の扱いに気をつけるようにとは言ったが、紅剣を失ったことには頓着をしていなかった。だが、それも済んで部屋へ引き取ろうとしたカントに養父が切り出したのは近隣の大都市マージにある騎士団への入隊の勧めだった。カントがどうしても武芸一般が苦手なのを、養父なりに案じていることは分かる。それは理解できる。

だが、カントはそれを切り出された瞬間に、血の気が引く音がこめかみを下っていったのを聞いた。剣も弓も、苦手と言うよりは遙かに苦痛に近かった。カントとて、まるきり努力しなかったわけではない。むしろ、自分が不得手な部分であることをよく理解していたから、必死で鍛練を積んだ。父の知り合いの騎士たちや、配下の剣士たちに幾度指導を頼み、その数と同じだけ失望させてきたのだろうか。いや、失望だけならまだいい。養父の期待に応えられない落胆を、自分の胸で飼うだけならいい。それは内省であって、自分の中でどうにか宥めすかして眠らせるものだから。

カントは怖いのだ。自分が養父の名声に傷を入れているのではないかという恐れ。彼らが自分を見下げるのと同じように、養父の見る目のなさを苦笑するのではないかという怯え。けれど、とカントは泣きたくなる。僕は、ちゃんとやってる。自分に課せられた義務と期待を裏切らないように必死に、それこそ血を吐くような思いで練習用の剣を握り、鏃の付いていない矢羽を持つ。やっているんだ。やれることは全部！そして、それでも、思うようには動いてくれない身体。

だが一条の光明もまた見えた。紅剣はどういう理屈なのか分からないが、格段に扱いやすい。剣がまるで意志を持っている錯覚さえ覚えるほど、易々と、軽々とカントの思い描く軌跡を、すさまじい速さでなぞってくれる。理想の剣の道筋を自分の身体が描き出すことなど、カントには望外のことであった。そして紅剣以外ではまるで同じ、ただの勘の鈍い子供――

カントはゆるく首を振った。リリクが自分の肩を軽く叩いて背を返した。カントは剣を鞘に納めて友人を追った。「適当なところにしておけよ、カント」

リリクが低く呟いた。

「あんまり頻繁に出し入れするのは良くないぜ。結局盗んだのと同じだからな、分かってんだろ」

「……うん……」

盗んだのと同じと念を押されればその通りであった。共通の秘密を抱え込んで二人は、それまで以上に行動を共にするようになった。傍目からは仲がよいと見えるだろう。間違いではなかったが、今はやや内実がずれ始めているのをカ

ントは感じ、そしてリリクも然りであろう。

剣のことは秘密だ。二人しか真実を知らない。だから漏れるときはお互いしかないと心の底でカントが考えていることを、リリクも分かっている。それが分かるのは、彼も同様だからだ。―― お互いに、相手方が喋ることとつまらない過失で他人に罪が露呈することを恐れていて……結局のところ、紅剣を素直に返すつもりがないのだった。

それに、最近クハイスの周辺に夜盗が出る。金品だけならよいが命まで取られてはと、子に厳しく言いつける親も少くない。薄暮を過ぎれば子供の姿はほぼ見かけなくなる。リリクもカントも、年齢だけで目立つのだ。

何度目かもしれない溜息を落とすとカントは紅剣を丁寧に布にくるみ、巨木にぼかんと空いたうろへ入れた。この木は街道から外れてはいるが姿は見え、長い年月に中が朽ちて空洞になっている。人はまず近寄ってこないし周辺は草の波、誰かに偶然にでも発見されることはない。ただ、街道を降りて何もない場所へ歩いていくように見えるから、回数が増えれば奇妙に思われるだろうとリリクが言うのは道理だ。分かっているのだ、そんなことは。

カントは一瞬目を閉じる。剣に魅入られているというならそうかもしれない。剣を手にしているときは心が躍る。自分の身にかかる周囲の期待と、その裏返しの落胆を忘れることが出来る。カントに武術を教える者たちは可哀相だと彼は自分で思う。出来の悪い、人なつこくない弟子はきつと重たい荷物と一緒にだから。溜息はきつと、つく方も辛いだろう。だが、つかれた方が辛いわけではないのだ。自分も他人にも、憐憫など何の役にも立たないのも分かっている。

そんなことを最近頻繁に考えてしまうのは、この剣の魔術というものかも知れなかった。カントは意地悪をしている。それをリリクには知らせない。紅剣を木へ隠すとき、目印となる窪みに重なるように立てかけることは自分一人だけの所作だ。だからカントには分かるのだ。リリクが口で何と言おうと、紅剣に自分と同じように魅入られていることが。俯き加減に足早に遠ざかろうとするリリクの背は、夕暮れの薄闇に滲み、いつもより小さく見えた。

街道へ戻ると二人は同時にそこを振り返った。燃えるような太陽の残滓に浮かぶ黒い影はひどく長く、暗く見えた。二人とも黙って家路を辿った。紅剣を搾取して以来、二人でいるときの会話はめっきり減った。共通の秘密を持つことで得られるはずだった強い絆は、いつの間にか別のものへすり替わっているような気がした。

こんなはずじゃなかったのに。カントが思うように、リリクも考えているだろうか。けれど、お互いにもう戻れないと思いつめてしまったのは確かだ。

紅剣に別の色を与えたとしたら、とカントは思う。それは多分、後悔の暗灰青。光の射さない、海の色。

こんな事を考えるのはよそうと何度も思い、それでもふらふらと思考の波に打ち寄せられて同じ場所を巡っている。煮詰まっているというなら本当だったし、違うというなら真実かも知れなかった。リリクはこの剣を欲しいと思っていないのだろうか、とカントはちらりと友人の横顔を見上げる。先ほどからずっと不機嫌に黙りこくっているリリクの輪郭は整って、出来の良い彫像のようだ。紅剣を隠したとき、リリクもそれに賛同したはずだった。あのとき、確かにお互いの瞳の中に同類の光を見た。そのはずだったのに。自分が紅剣にかまけているのを不機嫌に見ているのは、それが気に入らないからだ。リリクは思っていることを素直に表情に出す。

カントが紅剣にのめり込んでいくのを制止しようとするなら、それはあの剣の持つ魔力をまるで理解していないということだ。……自分だって、隠れて剣をもて遊んでいるくせに。それとも単純な嫉妬だろうか。カントにはいずれ、騎士への道が用意されている。リリクは殺傷から一番遠い位置に腰を据えなくてはならない。性質は真逆を向いている。カントは騎士には向かず、リリクは知識を詰め込むのが不得手だ。

だが、お互いに巡り会った相手が良いすぎて悪い。泥臭い海の上での生活など倦み果てていたのに、恵まれてみれば狭苦しい。窒息しそうな日常。押しつぶされそうな……養父母の、慈愛と赦しの眼差し。二人とも、自分の望む未来は手に入らない。だが、もし、カントの手に紅剣があれば、カントの希求は叶うことになる。鞆を作り替えればあれを腰に吊ることも可能だろう。

「カント、お前、何考えてる……？」

不意にかすれた声が出て、カントは現実に戻された。リリクは秀麗な顔を歪め、街道の石畳だけに視線をやりながら呟いた。

「俺は、あの剣のこと、誰にも喋る気なんかねえよ。ただ、あれはお前の剣じゃない。俺のでもない。お前だけが勝手に振り回したりすんな」

「.....どういう、意味」

「別に。お前が忘れてるようだから言っとくけど、あれは俺の剣でもあるんだからな。今から謝っても義父に頼み込んでもらえるのは俺のほうなんだぜ。わかってんのかよ」

カントは自分がはっきりと青ざめるのが分かった。リリクのこれは、体の良い脅しというものでないだろうか。リリック、と呟いた声が震えている。

「僕は、ただ.....」

何を言い訳しようとしているのだろうとカントは途中で言葉を切る。その代わりに、自分の胸の辺りを強く掴んだ。いいよ、とリリックが言った。

「何でもねえよ。.....そのうち、もっと上手い方法を考えようぜ」

リリックは素早く争論を避け、唐突に走りだした。町へと駆け戻っていく彼の影が細く長く伸びていくのを見送りながら、カントはそれだけは許さないと、小さく、重く、呟いた。

数日がごちなく通り過ぎていった。周囲はまたお馴染みの喧嘩だと二人の亀裂を笑って眺めている。リリクはそれに安堵を覚えている。深く追求されるのは、怖い。修学所の講義が終わると黙って荷物をまとめて出ていく、友人の後ろ姿はやけに尖っている。カントの良いところと悪いところは感情の起伏が少ないことだったが、沈んだままで静寂を保たれてしまうといたたまれない。結局、自分から話しかけることも出来ずにリリクは意地になってカントから目を背け続けた。

リリクは感情にまかせて舌打ちをし、鞆を掴んで教室から出た。海の上に渡された棧橋を足早に戻る。日暮れには少し早い、ずいぶん光は弱まっていた。リリクは不意に、カントともに喚き立てながら泥の魚を苛めることに熱中していた日々のことを思い出す。少しも楽しくもなかったし、心高ぶる事もなかった単調な日々が、唾を吐きたいほど嫌いなくせに、泣きたいほど懐かしくて美しく思えるのは何故だろう。そこから通過した僅かな時間が、それまで積み上げてきたはずの、自分たちの間に架かった橋を落としてしまった。

……元から「海の子供」としての連帯と、お互いの抱えている胸のくすみが同じ色をしていたこと以外に、自分たちを繋いでいたものなど無かったくせに。そんな偽悪でさえ、今は悲しいほど麗しく思えるのだった。

リリクは苛々と爪を噛み、立ち止まった。自分より小柄な友人の影が、長くなってきた影になって足を縫い止めた。「やあ、リリック」

呟いたカントに、ふいと顔を背ける。カントはそれを無視すると低く言った。

「僕、マージへ行くことにしたよ。騎士見習いになるんだ」

リリクは僅かに遅れてそうかと言った。その話は以前聞いたことがあった。カントは迷っている風だった。それを散々向かないだの鈍くさいだのと罵った手前、リリクは何を言っているのか分からず沈黙する。カントはそれを察したように微かに唇で笑った。

「いいんだよ、リリック。僕が決めたことだから。……僕はただ、君に願い事があったんだ」

何だよ、と言いかけてリリクはカントの望みが何であるかを思い当たった。

意識するより早く、顔が歪んだのが分かった。カントが何故こんな事を言い出したのかが分からないわけではない。彼がああ剣を振るうのを何度か目にしたが、普通の鈍重な仕種とは別人のように機敏で無駄のない身体の動きをする。それが紅剣によってもたらされているのだと、カントの口から聞いたことはないが、自明であるように思われた。理屈は分かる。餞別にしてやって彼の喜ぶ顔くらい見てもいいだろうというリリクの中の理知よりも、反射的な怒りの方が遙かに大きく、激しかった。

「あれはお前のじゃねえよ。お前一人が持っていくなんで、絶対に俺は許さないからな！」

カントがぴくりと頬を痙攣させた。リリクは絶対に駄目だと叫んだ。

「お前が持ってたって役に立たねえよ！」

吼えてからしまったと思うが、眼前に立つカントは恐ろしいほど冷淡だった。リリクが熱を持って激しく責めれば、彼も逆に意固地に冷えていく。カントの表情にあるのはそんな凍土であった。

「——役に立たないのは君の方だろ」

一瞬返す言葉が喉で消えた。リリクは怒りのあまりに自分が青ざめていくのが分かった。

「なん……だって……」

「だってそうだろ？ 僕はあの剣の使い道を知ってる。僕はあの剣を使うことで生きていけるんだから。でも君は、剣を振るわれた人を救うのが役目だろ。君の方こそ持ち腐れじゃないか」

リリクは返答に詰まって喘いだ。カントがじっとこちらを見ているのが分かる。だからリリクは渾身の力を視線に込めて、睨み返した。自分たちの間にあるのがもはや憎悪なのだと思えるのに十分だった。

世の中の全てに代用品があるとしても、あの剣だけは替えがきかない。リリクはやっと自分の胸から聞こえてくる、高らかな歌に耳を傾ける。それは欲しい欲しいと歌っている、強く強く訴えてくる、奥底からの疼き……——駄目だ、

とリリクは言った。カントが頬を歪めた。彼のそんな顔を、初めて見た。

「とにかく、駄目だ、カント。許さない。お前がもし勝手に持ち出したりしたら俺は、……剣のことを話すからな！」
あとは、リリクは返答を聞かない。カントの脇をすり抜けて家へと駆け出した。

——長い時間が滝のように流れ落ちていった後、リリクはようやく凍えたようになっていた唇を動かした。

「嘘、だ」

リリクは首を振る。脳裏が真白く塗りつぶされて、やがて赤く鼓動を打ち始める。その音が次第に大きくなり、耳元で直接がなりたてる。

嘘だ。嘘だ。そんなの、嘘だ。

リリクは音を振り切るように激しく首を振り、均衡を崩してよろめいた。養母がまあ、と大きな声を上げる。大丈夫と支える腕を思わず振り払い、リリクは身体ごと投げ出すように、椅子へ座った。頭を抱えて耳を塞いでも、まだ使者の言葉が耳に残っている。くっきりと全部が刻印されたように脳裏へ黒く染め抜かれている、あの言葉。いや、他の細かいことは消えてしまった。衝撃で、頭が割れそうに痛い。

(カント様をご存じないですか)

夕飯も済んだ頃に訪ねてきた海洋騎士家の使いは開口一番にそんなことを言った。使者の外套は夜露にじっとりと湿っており、長い間外を探索したことを暗に提示している。

(まだ戻られていないのですが、街道から外れた辺りで悲鳴がしたという話があって……)

瞬間リリクの脳裏に浮かんだのは、大気を赤く染める、血飛沫の残像だった。そんな物を見たことはないくせに、何か心の深くに鮮やかな映像がある。人の根元が血と肉に連なるせいだろうか。赤い、と思った時に思考はすぐにあの紅蓮の剣に結びつき、——そして、友人の元へと流れ着く。

相手が十分な悪であると明らかなき、彼は一体躊躇うだろうか。正義を振りかざすことを？ そんなはずはないとリリクは懸命に自分を落ち着かせようと深呼吸をした。彼は確かにあの剣に引きずられるように、急激に追い立てられていたが、だからといって、見知らぬ人に手をかけるような少年ではない。彼は確かに体を動かすことが人一倍苦手だったが、その代わり努力することの貴重さを知り、その結果幅広い知識や教養や善良な見識を身につけていた。

その考えはいくらかりリリクを落ち着かせた。そうだ、とリリクは自分に向かって必死で繰り返す。あいつはそんなことはしない。彼は限度と節度を知っているから……ほうっと息をつく、同時にやっとその呪文がリリクの胃へ落ちたような気がした。

使者には夕方彼と棧橋で別れたとリリクは答えた。それは事実ではあった。カントと別れて一人で家へ戻り、後は家の中にいたのは確かだ。手弦を失って帰る使者の姿が扉に消え、リリクは顔を手で覆いながら身を折り曲げた。

カント。お前、どこにいった？ まさか襲われたのか。いや、襲われたとするなら返り討ちにしたらどう。人を手に掛けてしまったのか。剣を振るう喜びを覚えるように？ それはとても恐ろしいことに思われた。震えが止まらない。尋常でないリリクの様子を怪訝にのぞき込む養父母に、ごちなく笑顔を向けてリリクは目を閉じる。

——お前じゃないよな、カント？

多分、それは本人には一生聞けないだろう。

「大丈夫、ねえ、リリック、顔色が悪いわ……」

狼狽える養母の声にも首を振り、リリクはごめん、と呟いた。話せないことが多くなるとリリクは逆に饒舌になったが、この事件のことはなるべく避けて通りたかった。嫌でもカントの、あの時の、あの目つきを思い出すから。リリクの不用意で下手くそな強迫を見据えた暗い目つき。

「本当に、何でもないんだ……」

懸命に自分に命じて微笑みを作ると、養母はやっと笑った。そうね、という声が暖かい。自分はこれを裏切ることは出来ないだろうとリリクは思い、それが出来たらどれだけ痛快だろうかとも思った。

「これからは、なるべく早く帰っておいで、リリク」

養父の重い声が言った。リリクは頷いた。カントが消えたことは明日には修学所にも広まる。修学所事態が暫く休校になることもあり得た。

「なあ、リリック。早く帰ってくるついでに、診療所の手伝いをしてみないか……勿論、無理にとは言わないが」

養父の言葉にリリクは顔を上げた。養父は妻と同じく暖かに笑っていたが、言葉に籠もっているものは真剣だった。リリクは曖昧な吐息をつく。カントもまた、騎士団への入隊を勧められたと言っていた。自分たちはもう選ぶべき時間に差し掛かっているのだ。未来への道を。

「お前が医者になりたいかどうか、そこでちゃんと考えればいい。私たちはね、診療所の後継者が欲しかったのではなくて、子供が欲しかったのだから。子供が親の跡を継がないことなど、何処にでもある話だ」

養父の言葉は優しい。リリクは不意に泣きたくなる。

「医者になるための勉強などは、興味があれば自然にどうにかなるものだ。診療所だって、人にやったっていい。お前の役目はリリック、私たちが看取ってくれることや可愛い孫や曾孫を与えてくれることだから」

リリクは頷く。診療所の後継という役割を果たせなくても構わない、お前がいてくれればいいのだという言葉が彼をやわく、窮屈な場所へ押し込める。もっと喧々と勉強しろ跡を継げと言われる方がどれだけ楽だろう。反射的な反発で、怒りのままに全てを発散できるのだから。優しさに触れる度、自分がそれを返す資格がないような気がしてならない。慰撫され、十分すぎるほどの愛情でくままれてなお、それを怒りに変えてしまう自分の中の何者かは一体どんな鬼なのか。

苛立ちはいつからこんなに自分に近くなったのだろう。リリクは誰もがうっとり眺める形の良い頬と唇を、思い切り醜く歪める。心の中にいつでも不満足な鬼がいて、それが衝動的で破壊的な何かを欲しがって吼えている。けれど、それが具体的な恐怖になったのがいつからかははっきりと分かった。……紅剣を自分たちのものにした、あの日から。

カントの目が次第に暗く、そしてどこか浮かされているように熱を帯びていくのが怖い。……そして、あの剣に魅了されて取り込まれてしまいそうな彼を見ていると、そっくり自分が鏡に映っているような気がして怖い。リリクにはそれは二律背反である故に、出口のない恐怖であった。

震えているリリクを気遣い、養父母は早く寝なさいと彼を寝室へ勧めた。リリクは素直に従うふりで上へ上がり、そっと窓から抜け出す。夜道を走りだすと、月だけが彼についてきた。

カント。お前は選んでしまったのだろうか？ 剣と共に生き、剣と共に屍の上を歩く道を？ そんなのは、お前には向いていない。これが思い過ごしであるように願いながら、それでもリリクはカントが剣を持ち出して使ったのだという確信があった。それこそがカントの望みであったのだから。美しい小説、遠い歴史の物語の中に彼が何を夢想していたのかは分かる。心逸り身の浮くような英雄譚——血の赤い華で飾られた。

ぶるっとリリクは震えた。紅剣の存在を確かめなくては生けない。もしカントが剣を使ったのなら、剣はそこにはない。剣があればカントは受難したのだ。どちらであって欲しいのか、リリクには分からない。けれど、どちらでも自分を襲うのが激しい後悔だということは分かった。

木のうろから紅剣の包みを取り出して、カントは重く頷いた。既に日は落ちかけて、紅剣と同じ色に空気ごと染めている。もう少し遅くなればきっと養家は心配して捜索を出すかも知れない。だからあまり時間がないのを承知もしながら、カントは包みをふりほどき、紅剣を抜いた。やはりそれは、圧倒的な存在感と蠱惑を振りまく剣であった。欲しい欲しいと身体の奥底から上がってくるものがある。カントは無理矢理首を振って、自分を落ち着かせるために深く呼吸をした。

夜盗。それは多分、とても好都合なのだ……——

剣を握りしめていると飛ぶような高揚や、刹那的な衝動が駆け上がってくる気がする。カントはそれが何であるか、もう長い間知っていたと思った。それは自分の望み。そうなりたいと願い、必死で希求しながらも叶わないものであると理解していた、心の奥からの、真実の声。

カントはぎゅうっと目を閉じる。物語の中の英雄のように。あるいは旅渡りの詩人の歌う勇者のように。毅然と大地を踏んで立ち、己の道を切り開いていけたら。心のままに、何にも縛られず、ひたすら、自由に、自由に……！

リリク。カントは友人だった少年の名を呟いて、顔を歪めた。僕たちは、とてもよく似ている。だけど本当は君が、君の方が、僕よりも何十倍も賢くて、保身家だ……それが彼に対する非難だったのか、憧憬だったのかはカントには遂に判別が出来なかった。

カントは剣を腰に吊って街道の方へ歩き出す。夜盗がどこでどう悪事を働いているかは分からないが、この剣を遠目にも目にすれば必ず吸い寄せられてくるだろう。そう考えながら歩くカントは、自分が薄く笑っているのに唐突に気付く。家で騎士たち相手に実剣で手合いをうっていた時怖くて殆ど動けなかったくせに、大地に足を踏むだけで沸いてくる高揚が自分でも不思議で、そして誇らしかった。カントが再び笑みになった、その時だった。

「君が主人となるって事で、じゃあ、いいのかな」

後ろから男の声がした。それはあまりに唐突で、突然だった。カントは驚愕と共に飛びすさり、剣の柄に手をかけた。あ、と思う間もなく自分の手が剣を抜き出す。白銀の抜き身が夕日にぎらぎら反射したのが目を焼いた瞬間、戸惑いも迷いも全てが塗り潰された。

カントは唇を開いた。何かを叫んだ。俊速に自分の手が剣を水平になぎ払う。まるで奇跡のような、完璧な軌道だった。

ふっと影が飛び下がったのが見えた。やがて少し離れた場所に人影を見いだして、カントは構えたままで誰だ、と低く問うた。体つきからして、男のようだった。

「僕？ 僕はその剣のおまけさ。巡り会うべき主人の良き理解者にして忠実なる下僕、そして巡り会うべきでない主人の導き手」

意味が分からない。カントは首を振って見せた。男はじっとカントを見ていたが、やがて肩をすくめた。

「全く君たちと来たら、譲り合ってるのか押しつけ合ってるのか知らないけど本当に長くかかったなあ……待ちくたびれてしまったよ。ああ、君には資格がないわけではなさそうだけど、でも期待薄というところだね。それよりはまだ、君のあの友達ごっこの相手の方がましだったような……」

それがリリクのことだとすぐに分かった。カントはお前、と叫んだ。苛立ち、怒り、そんな激しく熱いものが胸の底から吹き上げてきて、喉を焼きそうだ。怒鳴られた方はさほどそれには関心を寄せなかった。聞こえてるよ、と薄く笑うと、最近は駄目だなあと呟く。カントはますます自分の中の嵐が激しく吠えるのを感じながら、もう一度男を呼んだ。

「資格ってなんのことだ。リリクの方がましだったってどういう意味だよ！」

「資格は資格さ。お友達ごっこの彼の方がまだ剣の好みだというだけの話。ま、君はあんまり深く考えなくてもいい。その剣が怖くなって逃げ出すのか、とことん破滅するのは君自身が決めることさ……」

男が吐息で笑った気配がした。カントは剣を抜いたまま素早く突進した。衝動の囁きが甘く耳へ吹き付けてくる。素

直にそれに従ってカントは男の胴を払った。今度こそ、それは完全に男の命脈を立つはずだった。

だが、やはりそれは男には当たらなかった。すうっと彼の姿が周囲に滲んだかと思うと、虹のようにあっけなく消えたのだ。カントは取り残されて、一瞬ぼかんとする。その耳に、男の笑い声が微かにした気がした。カントは剣をおさめようとした。あの男が何であったのかを理解は出来なかったが、それよりも夜盗を自分の手で狩り出すことの方が優先だと思い直したのだ。だからすぐにカントは気付いた。自分の周囲でざわめいている、不穏な空気に。剣を構えなおして誰だ、というとき背後の草むらが揺れた。ふとそちらへやった視線の隅を、動くものがよぎってカントは再び視界を戻す。

ぱっと目に飛び込んできたのは剣の切っ先だった。身体が反射的に回った。かかとでぐるりと体の向きを変えると、初撃を外した男が信じられないといった顔つきで振り返るところだった。草むらが騒がしい。人数がいる。

「小僧！」

吠えかかれて、カントは確信する。彼の狙っていたものが飛び込んできたのだと。

剣を握り直す。足下からごうごうと、逆巻き昇ってくる衝動の色は、夕日よりも闇よりもなお赤い。紅蓮の色だ。これは血の色。鼓動がけたたましく興奮を叫んでいる。胸が痛い、歓喜のために！

カントは笑う。笑いながら彼の獲物たちに襲いかかっていった。

.....月が、とカントは思った。月が、出ている。綺麗な月が。辺りは一面血の沼、鉄臭の濃い空気が立ちこめていて、気分が悪い。.....けれど。

カントはようやく呼吸をして、肉塊からずりりと剣を引き抜いた。それは既に人の形を失っている。切り刻み、叩き潰したのは確かに自分なのにどこか現実味が薄くて、淡い夢のようだ。まだ荒い呼吸をなだめすかしながら剣を鞘に収めると、切り替わったように興奮が沈んでいくのが分かった。下を見やれば、人の形さえ失ったもの。カントは口元を押さえる。急激な吐き気に翻弄されるようによろよるとそこを離れた。

草むらで耐えきれずに吐き、座り込む。月は中天にかかり、既に夜は深い。震えは寒さのせいではなく、恐怖のせいでもなかった。思わず喘ぐほどの歓喜が余韻を噛みしめるように小刻みに痙攣しているのだ。カントは顔を歪めた。懼れと、歓喜と、その両方のために。

剣が。この剣が。

良いのか、悪いのか。

呼ぶ幻の、壮絶な光景。

待って。

僕はこんな.....でも.....しかし。

剣を納めなくては。それだけが不意に闇のような思考から姿を現して、カントは一人、頷いた。まだ震えている手のせいで、上手く切っ先が鞘に入っていない。焦れて顔を歪め舌打ちをしたとき、耳に妙な音を聞いた。それは背後からの足音のようだった。そろそろと、忍び寄ってくる気配。カントは納めようとした剣を握り直した。敵か、残党か？
けれどそのどちらかであるなら、あの圧倒的な愉悦を再び味わうことが出来る.....！

カントは素早く振り返り、剣をなぎ払おうとして目をしばたいた。佇む影は月光の下でひどく霞んで見えたが、間違いなくカントの知己であったからだ。

「リリク.....？ 何故、ここに.....」

ぼかんとした声であった。リリクが美しい顔を思い切り醜く歪めた。彼は気に入らないのだ。何が、と思う側からカントは自分の顔が強ばっていくのに気付いた。

「剣のことは、謝らないよ」

呟くと、リリクは僅かに遅れて溜息をついた。吐息が重く自分たちの間に流れたのが分かった。

「僕は君よりも資格がある」

カントは吐き捨てるような自分の声に、僅かに言い訳めいた色が付いているのを認める。二人の秘密だ、といったときにこの剣は二人の共有物になった。その条約を今、自分の方から一方的に破棄しようとしている。

「俺は、カント……」

リリクが何かを言いかけ、沈黙した。月が不意に、雲に消えた。

「僕は、リリク……」

カントは口を開きかけ、そこから零れるものが全て言い訳でしかないだろうと見切って口を閉ざした。剣と離れ、あの快楽や歓喜と離れ、もたらされるであろう夢見た英雄の物語から永久に乖離して生きていくことは、もう不可能に思われた。カントの内側で、誰かが必死で叫んでいる。欲しい、欲しい。一度現実になりそうだった夢を、どうして諦めなくてはいけないのだと。

「カント。剣を返そう。俺たち、間違ってたんだ」

リリクが低く言った。普段騒ぎ立てる性質の彼にこんな落ち着いて冷たい声音があることを、カントは初めて知った。嫌だ、とカントは首を振る。それは出来ない。もう出来ない。駄目なのだ。もう、戻れない——

「いやだ」

カントは泣き出しそうな自分の声が、愛しくなる。

「僕はこの剣があればきっともっと強くなれる。この剣があれば絶対に今までみたいな無様な真似はしない。剣があれば僕は自分の理想を追える。剣があればきっと、きっと」

「それは」

「いやだ！」

カントは叫び、剣を手にして後ずさる。一度見えてしまった希望の白が、周囲の黒を更にくっきりと見せた。嫌だともう一度叫び、カントは剣を強く握んだ。

「僕は誰よりも強くなりたい！ 誰からも同情されたり馬鹿にされたりするのはもう嫌だ、剣があれば僕はそれになれる、僕は強くなりたいんだ！」

「お前の力じゃないだろ！」

リリクが吠えるように叫んだ。カントは胸の真奥を突き刺されて一瞬身をすくめた。

「それはお前の力じゃない！ お前が自分で手に入れたものじゃないだろ！ そんなの、意味なんか、ないじゃないか！」

カントは喘いだ。リリクの言うことはどこまでも正しく、正しいからこそ憎かった。

「そう——かも知れない、リリク。けど、だったら、僕はいつかそれを自分の力にしてみせる！ 自分一人の力で生きていって見せる、リリク！ 君みたいにずるずると養家の世話になんてなるもんか！」

海の子供として海洋騎士の養子となったのも自分の力ではない。相手がカントを気に入ったのだ……愛玩動物を選ぶように、愛情の対象を選び、カントは選ばれた。それだけだった。愛情をかけてもらえれば嬉しく、期待に添えなければ辛かった。どんなに努力しても足りないものが多かった。

何故！ カントは月のない夜には泣き叫びたくなってそれを押し殺しながら毛布の下で丸くなったことを思い出す。養子になる以前の胸の悪くなるような日々の方が生きやすかったのだろう。清流で生きていく魚がいて、泥海でのたうつ魚がいて、それはお互いに、違うものにはなれはしないのだ。永久に。

カントは剣を鞘に収め、目の前の少年を見つめた。彼は身体全体をわななかせていたが、やがてぎりぎりの低い声を出した。

「お前が、一人で生きていくって？ 出来るもんか、そんなこと……お前はうすのろくて、鈍い、ただの子供じゃねえか」

嫉妬だと反射的に思った。リリクはカントが剣を持っていこうとするのが許せないのだ。それを思うとカントはうっ

すらと笑うことが出来た。それはリリクに向けた憫笑というものといえた。

「ただの子供なのはそっちだろ、リリク。君だって、養家の期待することは何一つ出来ないくせに」

意地の悪い言葉に、リリクが詰まった。カントは笑い、行けよ、と言った。

「もう行っちまえ、馬鹿なリリック。僕たちは最初から分かり合えてなんか、なかったんだ」

リリクは黙っていた。カントは行けよ、と繰り返した。風が吹いて、草むらを撫でた。ざわめきと共に、濃厚な血の臭いがした。リリクは顔を歪めていた。これ以上はないというくらいに、苦しげだと思った瞬間、彼は身を翻した。

街の方へかけさっていく彼の背に、カントは叫んだ。

「リーリック！」

影は立ち止まらなかった。

「僕は、君が、大嫌いだったよ！ さよなら、可哀相なリリック！」

そう怒鳴ってカントは剣を握り、街とは反対の方向へ走りだした。自由へ。生きにくくて呼吸のしやすい、泥海のような世界へ。

彼は元来た場所へ戻っていった。

そしてクハイスから、永遠にカントの姿は失われた。

夕日が沈もうとしていた。窓から見下ろすと診療所の入り口に妻が診療の終了を告げる札をかけているのが見える。ゆるく椅子に沈みながら机に向かって診療の記録を書く。アナイスはただの風邪。リークの骨はそろそろくつつく。ミルキの婆さんはまあ、年を取れば耳が遠くなるのは当たり前なんだがなあ。小さく笑ったとき、扉が叩かれた。きっと妻だ。

「あなた、お茶を入れたわよ」

思った通りにそれは妻であった。普段はさほど感じないが、光量の少ない部屋にいると肌に刻まれた皺は彼女の年齢を如実に語った。仕方がない。自分もまた、緩やかに老境というものへ向かって歩いている。亡くなった養父が肩が上がりえないと言っていたのを実感できる年齢になったのだ。季節の変わり目には手を振り上げないと届かない位置には物は置かれない。次第に肉よりも脂気の抜けたものが好きになってくる。若い頃の必死の勉学のせいで酷い近視になってしまった目が、最近をよく見える。これは老眼という奴との相殺の結果か。

妻の顔貌に過ぎ去った年月を一瞬で思うのも、老いとま向かう年齢になってきた証拠かも知れなかった。出会ったときはお互いに若かった。大都市マージの医療学校で知り合った時自分は20で彼女は18、医者のお卵だった自分と薬の調合士の卵だった妻はすぐに恋に落ち、結婚した。街に戻って養父の診療所を継ぎ、二人で力を合わせてきた。やがて養父を、そして養母を看取り、二人になった。自分たちの間に子供は授からなかった。子供は神が下さるもの、決して人の範疇ではない。だからそれについては諦めているが、妻と二人で日の終わりに茶を飲んでいると、ふと、子供がいたらと思うことも真実であった。夫の書いた診療記録を見ながら、妻がそれに合わせて薬の調合を書き足していく。そんな共同の作業も、この30年変わらない日常だった。ふと妻が顔を上げた。

「誰か来ているようね？」

確かに扉が叩かれている。急患だろうかと窓から見下ろすが、扉を叩く人影はしっかりと自分の足で立っており、具合の悪そうな連れもない。怪訝に思いながらも階下へ降りて細く扉を開くと、そこにいたのは黒髪の少年だった。年齢は13から15の間くらいだろう。僅かに怯えたような表情が何故か胸に残る。

「リレクトル＝アクスランド先生？」

彼は頷く。少年は良かった、と笑った。

「僕はヴァン＝リドーといいます。父の遺言で、先生にお渡しするものがあるんです。父の名は、ナセール＝リドー」

「……いや、私は」

そんな方は存じ上げないと困惑のままに口にしかけたとき、少年はあの、とそれを遮った。

「父からあなたに、これを渡してくれと頼まれました」

少年は長いマントの奥から細長い包みを引き抜き、それをほどいた。落日よりも尚赤い剣が、眼前にあった。一瞬呼吸が止まったような気がした。30年以上の時間が一息に逆巻き、巻き戻されていく。カント。呟いた声はかすれて震えていた。

「ええ、父はそう言えば分かる、と」

少年の声に我に返り、深く頷く。カント。消えてしまった子供。少年がそれと、と手紙を差し出した。

「父から、先生へ手紙を預かっています。読んでいただけませんか」

「もちろんだとも」

扉を開けて少年を中へ迎え入れながら、リリックは胸に手を当てた。

君は私のことを怒っているだろうか。多分そうだろうとも思うし、そうであって欲しいのかも知れない。私がクハイスから逃げ出した16才の頃、私も君も、とても苛立っていた。それが若さなのだとすることにも気付かないほど、私たちは苛立っていたね。そして私は短絡で、君は慎重だった。思い出せばきっと誰もが資質が反対だと言うだろうけど、私はそれが真実だったと思っている。

不思議なことにリリック、私は君に別れ際あれだけ酷いことを言ったにも関わらず、君は絶対に医者になりえたと信じている。君は優しく、そして強い。その優しさを表現する方法を知らなかっただけなのだと。でも、それが若いということなのだろうね。それだけでも価値があるのだから。

少し私の話をしても良いだろうか。

私はクハイスから逃げた後、剣を手にして戦場を点々とした。剣の魔力は絶大で、私は偽名を使って傭兵稼業を続けた後に騎士になり、騎士団の副長にまでなることができた。でもそれも、全ては君の言ったとおりにあの剣の力で、私の力ではなかった。私は割合それに早く気付いていたが、剣を捨てられなかった。踏ん切りがなかなかつかないのは、昔からのことだ。けれどももうそれも終わる。半年前の戦で私は左足を失い、その部分からの腐食で恐らくもうすぐ死ぬだろう。だから君に剣を返したいと思っている。君には必要ないものであることは承知しているが、それが筋だからだ。忠告をするならば捨ててしまった方が良くとも思うけれど。

あの時、私は君のいう言葉が正しいと分かっていた。正しいから許せなかったのだ。私は君に怒っていたし、きっと君も私のことを怒っていただろう。今でもそうかもしれない。

けれどリリック。私は時々月を見ると思い出す。あの晩の、君の泣き出しそうな顔を。そして夕日を見ると思い出す。クハイスの海に貝を投げて君と遊んだことを。それが全部美しく見えるのは何故なのか、私には分からない。けれど、美しいと思えるものを見ているとき、私は不思議に何もかも許せるし、許されているような気分になるのだ。

親愛なるリリック。もし君が不快であるならこの手紙をどうか捨てて欲しい。だが、最後に再び呼ばせてもらえないだろうか。

我が友と。

さらば、我が友よ。そして君の幸福を切に祈ろう。君の成功を信じていよう。君に神の恩寵が降るようにと、私は君を想う。君のために。

カント＝イーレ』

リリックは手紙を閉じて目をつむった。彼がどんな人生をそれから生きたのかを知って、何故か満たされたような気持ちになる。長い溜息をつくとき、目の前の少年が微かに怯えたような顔つきで、何か、と聞いた。

「いや……お父上は、亡くなったのだね……」

はい、と少年は頷く。戦場での傷が元で、という簡単な説明にも頷いて、リリックは手紙を丁寧に畳み、封筒に納める。

「剣は確かに受け取ったよ。ありがとう」

カントの忠告に従って街の骨董屋にでも売り払ってしまえばいい、とリリックは内心で頷く。金はこの少年に持たせてやるのが良いだろう。あの剣はカントが持っていったときから彼のもので、自分には必要なかった。

「君も遠路をご苦労だったね、しばらく私の家でゆっくりしていきなさい」

「いいんですか？」

「もちろん」

リリックは微笑む。昔から整った顔立ちは年齢を重ねた今でもそう悪い笑顔にはならなかった。お父上の跡を、と聞くと少年は複雑そうに笑った。

「僕は……剣もそううまくないし……父は僕がこれから食べる分を残して、残りを孤児院へ寄付したんです。僕もそれには賛成したのでいいのですが、僕は出来れば医者になりたいので、マージの医療学校へ行くつもりです」

リリクは目を細める。カント、お前が何を考えているか、あてて見せようか？

「——もし君がよければ、ここで診療の手伝いをしてみないか？ この裏がすぐに住居になっているから、そこから通えばいい。給金も当然払うよ」

少年は少しの間、ぼかんとしていた。やがてその頬に赤みが差してくる。それは破格の話ではあったのだ。でも、と言いかけた少年にリリクは殊更優しく笑い、肩を叩いた。

「医療学校は金がかかる割に、いい場所じゃない。卒業した私が言うのだから。それよりは実践から学んだ方が得るものが多いはずだ。私の妻は薬草の調合士でね、そちらも興味があるなら手伝えばいいから」

「でも、僕、そんな……」

「いいんだ——本当に、いいんだよ」

リリクは柔らかく言い、そして既に姿を隠して残滓だけを水平線の彼方に投げる日の方向を見た。美しいと思えるものを見ているときは不思議に何もかも許せるし、許されているような気分になる……そうだな、カント。本当に、そうだな。綺麗な夜空だ。お前といつか、見ていたような。

「……君のお父上と私は親友だった。たとえ30年以上会わなくても私たちは、お互いがお互いを案じていることを、分かっていたよ……」

それも今更真実に思われた。少年は僅かに笑って頷き、父もそう思っていたと思いますと付け加えた。

「だから私は、親友の残した君に出来るだけのことをしてやりたいと思っている。彼に罪を押しつけてしまった私の償いを、私は君で取り戻したいのだろうね。私の我が儘につき合ってくれる気になったら、ここへ来てくれれば仕事を教えるから」

少年ははい、と頷いた。

朝の診療室で少年が白衣に着替え、照れたように佇んでいるのをリリクが発見するのは10日後であり、ヴァン＝リドーがリリクの養子になるのは3年後。そしてヴァン・リドー＝アクスランドが南部大陸一の名医と謳われるようになるのは、およそ20年後のことである。

黒き魚達の渴き

<http://p.booklog.jp/book/32417>

著者：名嘉つぐみ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/birdcage123/profile>

<http://birdcage.main.jp/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32417>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32417>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.